

当事者研究全国交流集会 名古屋大会

NPO 法人 愛実の会

〒455-0021 愛知県名古屋市港区木場町 9-24

助成事業の概要

第15回当事者研究全国交流集会名古屋大会は、2018年10月7日（日）に愛知淑徳大学長久手キャンパスにおいて開催され、全国の障害当事者やその家族、支援者、学術研究者、一般市民などの約500名が参加しました。

この大会の目的は、障害経験を中心とした生活における苦労や困難についての当事者による研究である当事者研究の成果と方法を参加者の間で共有することでした。この目的のもと、大会ではおもに6つのセッションを開催しました。各セッションは次の通りです。(1) 登壇発表、(2) ポスター発表、(3) シンポジウム、(4) 分科会方式での演題発表、(5) ライブ演奏、(6) 当事者研究ネットワークについての説明。また、大会終了後には親睦会が開催され、有志の参加者が親睦を深めました。

事業の成果

この大会ではおもに6つのセッションにおける研究報告や交流を通じ、障害経験を中心とする生活上の困難や苦労をめぐる理解を参加者間で深めることができたと考えています。6つのセッションそれぞれの内容と成果については次の通りです。

(1) 登壇発表：

精神障害の当事者や支援者らが自身の苦労の経験について研究結果を報告した（17題）。いず

れの登壇者も、各々の苦労との付き合い方やそのメカニズムについて、ユーモアや仲間とのつながりを交えつつ報告しており、会場の参加者も時に笑いを交えながらまじめに熱心に聞き入っていました。

(2) ポスター発表：

精神障害の当事者や支援者、学術研究者らが自身の苦労の経験についての研究結果をポスターにおいて報告しました（12題；また登壇発表者のポスターもあわせて掲示）。いずれの発表も自身の困難経験の言語化を通して得られた研究成果を報告しており、昼休みの時間には参加者との間で直接質疑応答ができる場となりました。

(3) シンポジウム：

「ネットワーク化する当事者研究」というテーマのもと、向谷地生良氏（北海道医療大学看護福祉学部教授・べてるの家理事）と熊谷晋一郎氏（東京大学先端科学研究センター准教授）が当事者研究の源流となる歴史と今後の展望について講演しました。両氏の講演は、当事者研究のこれからの展開や障害当事者の社会生活の充実という課題にとり、一人一人の当事者の生きられた歴史を受け止めることの意義を明らかにするものでした。

(4) 分科会方式での演題発表：

分科会方式での演題発表では、7つの分科会に分かれてそれぞれ研究発表や意見交換を行いました。いずれの分科会においても、アドバイザー（講

師)を置き、登壇者と参加者とが直接言葉を交わしながらそれぞれの経験や研究内容、見解を共有することができました。各分科会のテーマは次の通りです。「初心者当事者研究」、「当事者研究の新たな展開」、「なぜだろう？当事者研究が流行らないのは！ in 名古屋」、「今なぜ『子ども』に当事者研究が必要なのか」、「家族のかたち」、「支援者当事者研究」、「ご当地当事者研究」。

(5) ライブ演奏：

自身も発達障害の当事者である高松信友氏と4人の仲間によるライブ演奏を通じ、参加者間の交流を深めました。

(6) 当事者研究ネットワークについての説明：

各地で活動する当事者研究会をネットワーク化し、研究成果と研究方法の共有を深めていくためのアイデアを向谷地生良氏が提案しました。

成果の広報・公表

この大会におけるすべての発表と講演はその要旨を抄録集に収め、参加者や関係者に配布しました。とくに登壇発表やポスター発表の要旨は、それぞれの発表者が自身の手でその研究成果をまとめた貴重な記録となっており、他の参加者にとって自身や身近な者の苦労や困難に向き合うためのよい導きとなると考えています。なお、大会当日の様子はインターネットにおいて配信され、大会に参加できなかった人たちとの間でも研究成果を共有することができました。また、大会についてのレポートをインターネットにおいて公開し、研究成果のさらなる共有を図ることも検討しています。

今後の展開

第15回目の当事者研究全国交流集会大会を愛知県の地において開催できたことは、今後の障害当事者をめぐる活動の展開にとり、とくに次の二つの理由から大きな意義をもっていると考えられます。第一に、全国各地に暮らす参加者が一堂に会することにより、障害種別や当事者・支援者の区別を超えた交流ができ、すでに次々回までの全国交流集会の予定が組まれたことから分かるように今後のさらなる連携関係形成のための足がかりとなりました。第二に、このような全国規模の大会を開催することをきっかけに、東海地方において活動する当事者や当事者研究会の間に連携関係ができつつあり、この大会は地域に根ざした結びつきを作るきっかけにもなりました。このように、この大会を今回開催できたことは、全国および東海地方という二つのスケールにおいて、障害当事者を中心としながら様々な苦労や困難を経験する人びとの間の連携関係を作り上げる重要な機会になったと考えています。